

Iサムエル記 イントロダクション

サムエル記は2巻に分かれています。ユダヤ教の聖典では1冊の本とみなされており、そのように扱われるべきものです。ラテン語ウルガタ聖書ではサムエル記は4つの王の書の最初の本です。私たちの聖書では、最初の歴史書2冊に、サムエルの名をつけています。サムエル記のかんりの部分は彼によって書かれたと私たちは確かに信じていますが、サムエルが著者だから彼の名前がつけられているというわけではありません。これは、サムエルの物語がまず最初にあること、そして、彼がサウルとダビデの両方に油を注いだことで、彼が主に登場しているからです。

サムエルは、彼の死が記録されているIサムエル記の24章までの著者と考えられます。見たところ、ナタンとガドがこの2つの書物を書き上げたようです。これらのことは、Iサムエル記10:25とI歴代誌29:29に書かれています。(Iサムエル記10:25、I歴代誌29:29参照)

(Iサムエル記10:25)「サムエルは民に王の責任を告げ、それを文書にしして【主】の前に納めた。こうしてサムエルは民をみな、それぞれ自分の家へ帰した。」

(I歴代誌29:29)「ダビデ王の業績は、最初から最後まで、予見者サムエルの言行録、預言者ナタンの言行録、先見者ガドの言行録にまさしくしている。」

サムエル記には、いろいろと馴染み深い特色が含まれています。イスラエル王国の興隆のこと。ハンナと彼女の小さな息子、サムエルのこと。サムエル記には、ダビデとゴリアテの物語と、並外れて感動的なダビデとヨナタンの友情も記録されています。サウル王がエンドルの霊媒を訪れる記事もあり、IIサムエル記7章には、神さまのダビデとの契約が書かれています。IIサムエル記7章は、神さまのみことばの中で偉大な章のひとつです。そして最後に、ダビデがバテシェバのことで犯した大きな罪のこと、そしてダビデの息子アブサロムの反抗のことが記録されています。

士師記では、神さまは、深刻な失敗や欠陥を持つ多くの普通の人たちを使われたことを学びました。彼らの物語は、普通の人である今日の私たちにとって、大きな励ましです。でも、IとIIサムエル記では、私たちは幾人かのとても立派な人たちに会います。ハンナ、エリ、サムエル、ヨナタン、そしてダビデです。サムエル記を学んでいくに連れて、私たちはこれらの人たちひとりひとりと知り合いになります。

IとIIサムエル記のテーマと考えて良いものが三つあります。

最初は祈りです。Iサムエル記は祈りで始まり、IIサムエルは祈りで終わります。そしてその間にもたくさんの祈りがあります。

第二のテーマは王国の興隆です。この2冊にイスラエルの政府が神権政治から王国に変わることが記録されています。大きな意義があるのは、IIサムエル記7章で神さまがダビデと結ばれた契約が私たちに与えられていることです。王国については、ちょっとあとにもっと詳しく話します。

第三のテーマは、預言者の役職が起こることです。イスラエルが神権政治だったときには、神さまは祭司職を通して働かれました。ところが、祭司たちが失敗し、王に油が注がれたとき、神さまは祭司たちを脇に置かれ、ご自分の使者として預言者を立てられました。イスラエルの国のためには、このこと(王が立てられたこと)は進歩ではなく、墮落という結果をもたらしたことが分かります。

王国の興隆は、特に大切なことです。IとIIサムエル記には、王国の起源が記されています。王国は、旧約聖書と新約聖書の両方を通して、とても重要な話題です。新約聖書の最初のメッセージは、バプテスマのヨハネのメッセージです。

(マタイ3:2)「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

彼が話している御国は、旧約聖書の、サムエル記から始まった王国のことです。この御国には、しっかりした歴史的根拠と、地上の起源、そして地理的な境界線があります。この御国には王がいて、その家臣たちは現実の人々です。

神さまが選ばれた政治形態は、王に治められた王国です。でも、だからと言って私たちの今日の政府を変えることで私たちの問題が解決するわけではありません。“形態”が悪いわけではありません。その形態に関連している“人々”が悪いのです。でも、神さまの理想は王国であり、神さまはこの地球上の王座に、いつの日にかご自分の王を置かれるつもりです。平和の君であるイエス・キリストがこの世を支配されるとき、主が行われることは、人間の王が今日行っている務めとはずいぶん違うでしょう。貧民救済プログラムも、環境保全プログラムも、道徳改革も、必要ではなくなるのです。むしろ、水が海を覆っているように、義と平和がこの地球を覆います。

サムエル記には、きたるべき千年王国がいくつかの点であらかじめ示されています。そして、イスラエル王国の準備の中に、私たちはこの世に必要な三つのものを見ます。

- (1) 義によって働かせる力を持った王。
- (2) 神さまに完全に信頼して治める王。
- (3) 神さまに完全に従って治める王です。

やがて来られる王の王である主イエス・キリストこそまさに、今日この世がはなはだしく必要としている唯一の王であるお方なのです。

アウトライン

I. 神さまの預言者、サムエル。1－8章

A. サムエルの誕生。1－2章

1. ハンナの祈りと答え。1章
2. ハンナの預言的な祈り。宮での幼子サムエル。2章

B. サムエルの召し。3章

C. 最後の士師、最初の預言者(預言者の役職)。4－8章

1. 契約の箱がペリシテ人に奪われる。サムエルへの神さまのこぼれが成就する。エリが死に、彼の息子たちが殺される。4章
2. 神さまが、契約の箱のゆえにペリシテ人をさばかれる。契約の箱がベテ・シェメシュに返される。5－6章
3. サムエル、信仰復興(リバイバル)を指揮する。(偶像を排斥し、エホバに立ち返る)。エベン・エゼルでの勝利。7章
4. イスラエル、神さまを拒否し、王を要求する。サムエル、国民に警告するが、王を約束する。8章

II. サタンの人、サウル。9－15章

A. 受け入れられたサウル。9－10章

1. 王として選ばれたサウル。9章
2. 王として油注がれたサウル。10章

B. 支配するサウル。11－12章

1. アモン人に対するサウルの勝利。11章
2. サムエルからサウルに権威を譲渡する。12章

C. 拒否されるサウル。13－15章

1. 神さまに対するサウルの反抗。13章
2. ヨナタンによるペリシテ人に対する勝利。サウルが手柄を横取りする。14章
3. アガグに関するサウルの紛れもない反抗と不従順。15章

III. 神の人、ダビデ。サタンの人、サウル。16－31章

A. ダビデ、油を注がれる。16章

B. ダビデ、訓練を受ける。17－18章

1. ダビデ、ゴリヤテを殺害する。17章
2. ヨナタンとダビデ、契約を結ぶ。サウル、自分の娘ミカルをダビデに与える。18章

C. ダビデ、訓戒を受ける。19－30章

1. サウル、再びダビデを殺そうと試みる。19章
2. ヨナタン、ダビデの逃亡を手助けする。20章
3. ダビデ、ノブとガテに逃れる。21章
4. ダビデ、家来を集める。サウル、神さまの祭司たちを虐殺する。22章
5. ダビデ、ペリシテ人たちと戦う。サウル、ダビデを追撃する。ヨナタンとダビデ、契約を結ぶ。23章
6. ダビデ、エン・ゲディでサウルのいのちを助ける。24章
7. サムエル死す。ダビデとアビガイル。25章
8. ダビデ、ジフの荒野でもう一度サウルのいのちを助ける。26章
9. ダビデ、ペリシテ人の地(ツィケラグ)に退く。27章
10. サウル、エン・ドルの霊媒に伺いを立てる。28章
11. ペリシテ人たちは戦いのときにダビデを信用しない。29章
12. ダビデ、ツィケラグを襲ったアマレク人たちと戦う。30章
- D. サウル、戦いで致命傷を負い、自殺を試みる。ヨナタン、死す。31章

1章

テーマ: サムエルの誕生。サムエル、エリのところに連れて行かれる。

Iサムエル記は、敬虔な女性の懇願から始まります。人々が王を懇願している間に、ハンナは子どもを懇願します。神さまは女性の懇願の上にご自分の王座を建てられます。女性が高められた場所に着くとき、神さまは彼女のために王座を建てられます。

大祭司エリは、ハンナがシロの会見の天幕の前で祈っているとき、彼女が酔っ払っているのだと思います。彼女が子どもを切望しているのを知ったとき、エリは彼女を祝福します。サムエルがハンナに生まれ、ハンナは誓いの成就として、サムエルをエリのところに連れて来ます。

(Iサムエル記1:1-2)「エフライムの山地ラマタイム・ツォフィムに、その名をエルカナというひとりの人がいた。この人はエロハムの子、順次さかのぼって、エリフの子、トフの子、エフライム人ツフの子であった。エルカナには、ふたりの妻があった。ひとりの妻の名はハンナ、もうひとりの妻の名はペニンナと言った。ペニンナには子どもがあったが、ハンナには子どもがなかった。」

エルカナにはふたりの妻がありました。おそらくあなたは、神さまがこれを承認された、と思っておられるでしょう。いいえ、そんなことはありません。この記録を読み進んでいくと、神さまは彼にふたりの妻がいたことを認めてはおられなかったことが分かります。

あることが聖書に記録されているからと言って、そのことを神さまが是認しておられると言う意味ではありません。神さまは、ただ単に、歴史、人物、出来事に関する事実を述べておられるに過ぎないのです。たとえば、サタンのうそが聖書に記録されていますが、それは、神さまがサタンのうそを認めておられると言う意味ではないのです！アブラハムが召使のハガルを第二の妻として迎えたとき、神さまはご自分の反対を示されました。事実、アブラハムの息子の子孫たちは今も存続しています。ハガルによるアブラハムの息子、イシュマエルはアラブ諸国のかしらとなり、ユダヤ人とアラブ人は今も争っています。

エルカナに妻がふたりいたせいで、家族の中には問題がありました。そのことが、神さまがこのときに彼らを祝福しておられなかったことの証拠です。

(Iサムエル記1:3)「この人は自分の町から毎年シロに上って、万軍の【主】を礼拝し、いけにえをささげていた。そこにはエリのふたりの息子、【主】の祭司ホフニとピネハスがいた。」

長いこと私はこの節が心にひっかかっていました。一体全体どういうわけで、サムエルはエリの息子たちが会見の天幕にいたことを私たちに知らせなければならなかったのでしょうか？あとになってそのわけが分かります。会見の天幕に神さまを礼拝しに行くことは、こうあるべきと私たちが思っているのとは全く違いました。実際、会見の天幕は危険な場所でした。なぜなら、あきれた話ですが、このエリの息子たちは、「ベリアルの子供たち」あるいは悪魔の息子たちだったからです。

一部の教会は、最悪の場所であり、もっとも危険な場所です。私は人々が‘二階の部屋’に関して、**「イエスさまと一緒にそこにいられたら、どんなに良いでしょう！」**と言うのを聞いてきました。本当にそうでしょうか？その‘二階の部屋’にだれがいたか、ご存知ですか？サタンです！サタンは呼ばれてもいないのに、そこにいたのです。記録には、サタンがユダに入った、と書かれています。その夜、‘二階の部屋’はエルサレム中で一番危険な場所でした。そのように、サムエルの時代、神さまを礼拝しに行くのは、困難なことでした。エリの息子たちの内に、悪が存在していました。Iサムエル記のこの大事なときに、このことが書かれているというのは興味深いことです。

(Iサムエル記1:4-5)「その日になると、エルカナはいけにえをささげ、妻のペニンナ、彼女のすべての息子、娘たちに、それぞれの受ける分を与えた。しかしハンナには特別の受け分を与えていた。【主】は彼女の胎を閉じておられたが、彼がハンナを愛していたからである。」

エルカナは、もうひとりの妻と彼らのすべての子どもたちよりも、ハンナに多くのものを与えました。なぜでしょう？彼はハンナを愛していたのです。

(Iサムエル記1:6)「彼女を憎むペニンナは、【主】がハンナの胎を閉じておられるというので、ハンナが気をもんでいるのに、彼女をひどくいらだたせるようにした。」

ハンナの敵は誰でしょう。エルカナのもうひとりの妻、ペニンナでした。彼らは口をきくような状態ではありませんでした。そして、この家庭はあまり快適な家庭ではなかったのです。人がふたりの妻をもつことを神さまが承認されると、誰が言ったのですか？彼らは家族の問題を抱え、助けをもらうために話しに行くカウンセラーもいなかったのです。ハンナはおそらく、このとき世界で一番みじめな人物だったことでしょうが、彼女は祈りをもって神さまのところに行きました。

(Iサムエル記1:7-11)「毎年、このようにして、彼女が【主】の宮に上って行くたびに、ペニンナは彼女をいらだたせた。そのためハンナは泣いて、食事をしようとしなかった。それで夫エルカナは彼女に言った。『ハンナ。なぜ、泣くのか。どうして、食べないのか。どうして、ふさいでいるのか。あなたにとって、私は十人の息子以上の者ではないのか。』シロでの食事が終わって、ハンナは立ち上がった。そのとき、祭司エリは、【主】の宮の柱のそばの席にすわっていた。ハンナの心は痛んでいた。彼女は【主】に祈って、激しく泣いた。そして誓願を立てて言った。『万軍の【主】よ。もし、あなたが、はしための悩みを顧みて、私を心に留め、このはしめを忘れず、このはしめに男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を【主】におさげします。そして、その子の頭に、かみそりを当てません。』

「彼女の心は痛んでいた」という表現は、息子がいなくて彼女が深く落胆している様子を説明しています。そこで彼女は息子が与えられるように祈り、もしその願いがかなえられるなら、神さまにふたつのことを約束しました。

(1) その子は彼の一生の間、レビ部族の奉仕の中で祭司となること。そして

(2) その子を神さまへのナジル人とすること。つまりその子は神さまの奉仕のために取り分けられるということです。

(Iサムエル記1:12-13)「ハンナが【主】の前で長く祈っている間、エリはその口もとを見守っていた。ハンナは心のうちで祈っていたので、くちびるが動くだけで、その声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのではないかと思った。」

エリは大祭司でした。そして彼はこの悩み抜いた女性が会見の天幕に来て、祈るのを目にしました。彼は彼女の口を見て、唇が動いているのは見ましたが、何の音も聞くことができませんでした。明らかにエリは彼女の唇を読むこともできませんでした。彼の反応を見てください。これはこの当時がどういう状況だったかを見抜く手がかりになります。エリの息子たちはそこで酔っ払ってどんちゃん騒ぎをしていました。エリはそのことを知っていましたが、見て見ぬふりをしていました。彼は甘い父親でした。ハンナが心にそれほどの熱意をもって祈っていたのに、エリは彼女が酔っていると思いました。どうしてだか分かりますか？他の酔っ払いが主の家に来っていたからです。この、礼拝のための場所は、この当時最高の場所ではありませんでした。

(Iサムエル記1:14-15)「エリは彼女に言った。『いつまで酔っているのか。酔いをさましなさい。』ハンナは答えて言った。『いいえ、祭司さま。私は心に悩みのある女でございます。ぶどう酒も、お酒も飲んでおりません。私は【主】の前に、私の心を注ぎ出していたのです。』」

今日、ハンナほどの熱心な祈りはあまり見ることはありません。あなたが祈る祈り方をみて、人々は“あなたが”酔っ払っていると思うのでしょうか？ 私たちの祈りは、とてももったいをつけた祈りです。エリに間違った印象を持って欲しくないと思ったハンナは、次のように言いました。

(Iサムエル記1:16-18)「『このはしためを、よこしまな女と思わないでください。私はつのる憂いといらだちのため、今まで祈っていたのです。』エリは答えて言った。『安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるように。』彼女は、『はしめが、あなたのご好意にあずかることができますように』と言った。それからこの女は帰って食事をした。彼女の顔は、もはや以前のようにではなかった。」

エリは、自分の間違いに気づき、預言的な祝福を与えました。ハンナの「顔は、もはや以前のようにではなかった(countenance was no more sad: 顔つきはもはや悲しくはなかった)」とは、神さまが自分の祈りを聞かれ、それに答えてくださると彼女が確信をもったことを示しています。

サムエルの誕生

(Iサムエル記1:20)「日が改まって、ハンナはみごもり、男の子を産んだ。そして『私がこの子を【主】に願ったから』と言って、その名をサムエルと呼んだ。」

“サムエル”という名前は、「神さまのことを聞く(heard of God)」という意味です。

先ほども言いましたが、このIサムエル記は、敬虔な女性の懇願で始まります。人々が王を懇願していた頃、ハンナは子どもを懇願していました。神さまは女性の懇願の上に王座を築かれます。女性が高められた場所に着くとき、神さまは彼女のために王座を建てられます。

私たちの現在の社会とは、何という違いでしょう。このところ数ヶ月、私たちは堕胎、堕胎、堕胎ばかりをニュースで聞いていました。ここで、ハンナは子どもが欲しいのですが、今日の女性たちの中には、子どもが欲しくない人たちがいます。もちろん、母体のいのちのため、また時には赤ん坊のために堕胎を余儀なくされることもあります。それは専門家が決めることであり、医学的な診察を受ける必要があります。ところが、今日の問題は、人々は罪を犯したいのですが、自分の罪の責任を取りたくはないのです。

私は、もし人が罪を犯したなら、自分の罪の結果を担わなければならない、という立場をとります。もし、子どもができたなら、その子は生まれるべきであり、その子をこの世にもたらした人たちがそのこの責任を負うべきです。人々は罪の結果から何とかして逃れようとしています。私たちは次のような原則を理解する必要があります。

(ガラテヤ6:7)「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」

私たちは、堕胎の時代に生きています。ハンナは息子が欲しい時代に生きていました。そして彼女はその息子を主にささげたのです。彼女の懇願の上に、神さまは王国を築かれました。この女性の懇願に対する、何とすばらしい贈り物であり、記念碑であることでしょう！